慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	平間洋一著『第一次世界大戦と日本海軍：外交と軍事との連接』
Sub Title	Hirama, Yoichi "A study of World War I and the Imperial Japanese Navy : linkage between diplomacy and military operations"
Author	増田, 弘(Masuda, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1998
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.71, No.12 (1998. 12) ,p.155- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19981228-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

平間洋一著

『第一次世界大戦と日本海軍
——外交と軍事との連接——』

“Splendid and Little War”、これは米西戦争（Spanish-American War）の別称であるが、もし日本近代史にこれと近似する戦争を探すならば、それは第一次世界大戦となるだろう。なぜなら、この戦争で日本は、わずか数か月間のドイツ軍との戦闘の末、中国山東半島および赤道以北の太平洋諸島のドイツ権益をすべて獲得したばかりか、戦争好景気を背景に輸出を急進させて債務国から債権国へと転じ、さらにパリ平和会議では世界五大国の一国に列せられる栄誉に浴したからである。まさしく日本にとって第一次大戦は、軍事的にも政治・外交・経済的にも、「濡れ手に粟」の「天佑」にほかならなかった。

しかしながら史実を詳細に紐解けば、日清戦争や日露戦争がそうであったように、日本はこの戦争の過程で決して容易な勝ち方をしていたわけではなかった。陸海軍は軍事作戦に全エネルギーを集中して勝利を掌中に収めたわけであるし、外務省を中心とする政府は、列強間の水面下の外交的攻防に神経をすり減らす努力を重ねた結果、大きな国益を獲得したのである。日本は、もしも軍事作戦を一手間違えば手痛い打撃を被り、外交政策を一つ間違えば国際的孤立を招く恐れが十分あった。実にきわどい線上を歩んでいたのである。

本書は、従来顧慮されることがなかった第一次世界大戦期の日本海軍の行動を丹念に追い、上記のような薄氷を踏む状況を第一次資料を縦横に駆使して明らかにすると同時に、軍事と外交がどのような同心円を描くのかを究明した本格的研究書である。

本書の構成は次のとおりである。

序　章　研究の視角と内容
第一章　参戦と日英米関係

第二章　日英連合作戦と日英豪関係
第三章　太平洋における軍事行動と日米関係
第四章　中国大陸と日本海軍
第五章　大戦中の対英協力と海軍
第六章　第一次大戦の波動とその余波

以下、評者の興味に沿いながらも、本書の特筆すべき内容に言及したい。

まず第一章では、日本海軍の参戦決定が消極的・受動的であったこと、海軍省と軍令部間に軋轢があったこと、イギリス内部でチャーチル海相とグレー外相間に戦局認識の相違があり、それが日英間の参戦、戦域制限といった問題に影響をもたらしたこと、しかしこのイギリス外務省・海軍省間の相違や混乱、イギリス海軍の戦局の不利が日本海軍に味方し、戦域問題をうやむやのうちに解消させ、日本海軍に念願の南洋諸島占領を実現させる経緯が論じられる。第二章では、日本海軍の南洋諸島占領の背景をなす南進願望と、その推進者秋山軍務局長の動向、南進政策へのイギリス・オーストラリア側の対応、特に後者の対日警戒心がアメリカへの接近をもたらす事情が明らかにされる。

第三章では、北米沿岸を警備中の巡洋艦浅間がマグダレナ湾で座礁事件を起こしたことが、ドイツにより日米英離反政策をもたらし、移民問題で揺れる日米関係のみならず、日本とメキシコ間、さらにアメリカとメキシコ間の外交関係にまで波紋を投げかけたこと、石井大使が対米交渉で行き詰まると、日本海軍がハワイに巡洋艦を特派し、太平洋航路の警備を受諾する姿勢をランシング国務長官に印象づけ、中国特殊問題の解決に寄与しようとした事実が示される。第四章では、青島攻撃作戦中に生じた日英間の戦後を睨んだ国益争いの実態のほか、中国への武力進出に消極的であった海軍が、二十一か条要求に伴う中国側の反日運動により、居留民保護のため介入していく過程と、逆に日米関係悪化やロシア革命の影響を考慮して、中国海軍の強化と提携を模索する動向が論じられる。

第五章では、海軍が地中海へ巡洋艦一隻、駆逐艦一二隻から成る艦隊を派遣する経緯が明らかにされる。とりわけ、連合軍側から日本の非協力を非難する声が上がったからというよりも、戦後に南洋諸島領有を実現したいとの願望が海軍当局をして艦隊派遣を決意させた実情が示される。他方、陸軍がヨーロッパ派兵に応じなかった最大の理由として、アングロ・サクソン連合に対峙する日独露協定の戦後構想があった事実が提起される。第六章（終章）では、海

軍が今後の戦争を長期戦・総力戦の形態を展望しながらも、結局貧弱な国力に伴う「速戦即決」、「早期決戦」主義に傾斜してしまう事情、また戦後の平和思想や反軍気運の増大に対処するため、徐々に統帥権独立論を固めていく事情、さらに戦後イギリス側から対日批判が噴出し、それが本来親英的な日本海軍を次第に反英・親独へと傾斜させていく事情が論考される。

本書の学問的功績は、軍事の視角そして軍事と外交の「連接」という視角から、第一次世界大戦に関する既成の外交史研究の間隙を埋めたことである。すなわち、著者は、日本海軍が実施した作戦の概要を史料分析をもって明らかにすると同時に、日本海軍がどのような意図をもって国策決定に関与したかといった軍事作戦と外交との重複部分を解明することによって、従来の研究（陸軍と中国、あるいは日英、日米二国間関係に限定されていた）を補完したのである。それは海上自衛官を経て防衛大学校教官というキャリアをもつ著者であるからこそ、可能となった。

それにしても、一つの斬新な切り口からこれほど無数の新事実が流出するものであろうか。日本海軍の南進策にはシーメンス事件で失墜した海軍の威信回復という意図があったことや、日本の南洋諸島占領がオーストラリアをしてアメリカに接近せしめたこと、浅間座礁事件がドイツの日米英離反政策をもたらし、日米、日英関係に影響を及ぼした事実、石井・ランシング協定成立の背後に日本軍艦が貢献した事実、陸軍の対中国武断主義に比して海軍は中国海軍の育成と連携の構想が存在したこと、地中海への艦隊派遣と南洋諸島領有に接点があった諸事実など、瞠目せざるを得ない。総じて、外交史研究の再構築を促す問題提起である。また資料という点が線へ、さらに線が面へと飛躍していく手法が堅実であることにも留意したい。晩学の士とは思えぬ迫力と筆致は見事ですらある。

ただ惜しむらくは、第六章である。第一次大戦を経験した日本海軍が、なぜ長期戦・総力戦を展望しながら「速戦即決」主義へ回帰してしまったのか、なぜ海軍は日英同盟存続への取り組みに不足があったのか、なぜ進歩的海軍がワシントン体制派を主流とせずに三〇年代初頭の統帥権問題へと雪崩現象を起こしたのか、といった論考にいまひとつ説得力が足りないように思われる。この一九二〇年代、三〇年代に関しては、本書に続く著者の重要課題として、今後軍事と外交の連接を一徹究明されることを願ってやまない。

（慶應義塾大学出版会、一九九八年刊）

増田　弘